

農業経営者ルポ

文 牧瀬 和彦

「この人この経営」第20回

矢野隆一さん(41歳)

T 869-2503

熊本県阿蘇郡小国町大字下城44530

TEL/FAX 096-748-0729

大根にも野菜と肉を…
開墾農地で経営を面白がる



渓谷の片側一車線道を阿蘇方面に向かう。両脇の切り立った岩肌の隙間を縫うように国道を進む。

目印の小学校の向かい側から、山肌に向かい、急な細い道を一気に這い上がる。すると空が広がり、一気に視界が広くなり、山肌もなだらかになった。視界の変貌が、新天地に上がってきたような錯覚を覚える。

矢野さんはそんな新天地で大根や椎茸を家族で生産している農業経営者だ。

●借地・連作障害の悪循環

大根を8ha生産している矢野さんの特徴は、新規に開拓・造成された畠地で緑肥によるローテーション栽培を行っていることだ。

【プロフィール】
昭和34年6月28日生まれ。21歳より家業に就農。1991年頃から農用地整備公団による畠地造成地を入手。現在、青首大根8ha栽培の他シイタケ栽培を行っている。

従来の大根生産經營は、連作障害などによる病害虫との攻防に明け暮れる

現在、畠は4haの栽培地で、大根栽培である。

のか普通であつた

矢野さんは、土づくりに精を出し始めた。平成2年のことだった。
現在、借地の畠は4ha。残りは自作地での大根栽培である。

掘り続けた。そして堆肥。糞がらやカヤを入れたりもした。厩肥を近隣の酪農家から引き取れるように、堆肥舎を自力で建てた。

●器はできた
これからは中身の充実だ

化成肥料と農薬に頼る栽培体系を根本的に見直し、緑肥にヘイオーツ、マリーゴールド、イタリアンライグラス等を播種し、それをそのまま鋤き込んでだ。

矢野さんは、10年続けてきて実感している笑い話ですけどと言いながら

矢野さんは、10年続けてきて実感している笑い話ですけどと言いながら「人間と同じで、大根にも野菜と肉に当たるものが必要なんですね」「縁肥は大根にとっての野菜、化成肥料は肉ですね」と。化成肥料だけに頼つていてはいい大根は出来ない。

緑肥を鋤き込むことにより、軟腐センチュウの害はほとんど出なくなつた。

萎黄病は70センチのプラウ耕で天地返しで対応している。

緑肥を主体としたローテーション。

堆肥は大根のためというより緑肥の為のものと考えている。

しかし、転機は就農10年目に訪れた。農用地開発公団の事業で、近隣の山の

農地造成が始まつたのだった。



標高860メートルの畠 イタリアンライグラスが青々としている。秋には鋤き込まれる

「標高が高いことは悪いことではないですよ」と矢野さん。 「標高が離れていることにより、気温・気候のずれが生じる。それを活かして合理的な作業・栽培体系を組むことができる。出荷時期も分散できる。

矢野さんは、開墾地で栽培を始めて10年経った現在を一つの節目と捉えている。

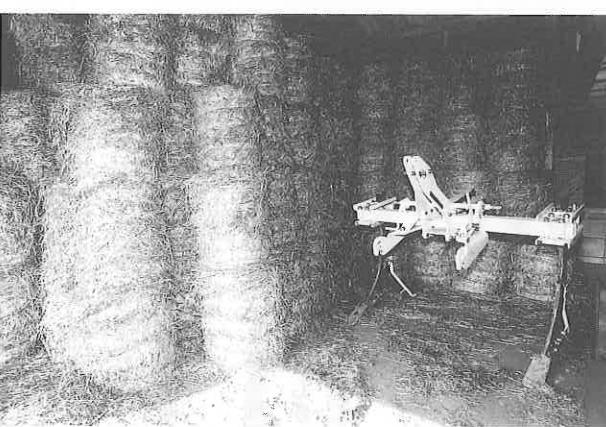
就農しての10年は、疑問を持ちながらも既存の栽培方法に流されてきた。開墾・土づくりを続けてきたこの1年で、やつと自分なりの栽培体系、農業経営の「器」が出来上がってきたのだ。

「冬の一時は焼き芋売りも面白いかな?」とニヤニヤしている矢野さん。

区切りの10年を迎える。これからは経営の内容を充実させる。これからの10年が矢野さんの経営の仕上げの段階だ。

だから、これから中身を充実していく

●多彩な組み合わせを手探りで



(写真上) 排水性確保のため、サブソイラを導入。(写真中) 堆肥切り返し作業。(写真下) クローラトラクタにキャリアを付けて 大根の搬出に重宝している

するキャリア、大根洗い器など機械化し、過重労働にならぬような省力化も考えなければいけない。

そして何より、大根の品質を向上することに重点を置く。

今は青首大根だけだが、今後は消費ニーズにあつた品種にも取り組んでいきたいと語る。

からの10年で、胸を張つて引き渡せるものにしたいと密かに胸に決めているようだ。



シイタケ ホダ木300本を栽培

数多くの選択肢と判断を繰り返し、現在のスタイルを見つけだした。しかもこれからは消費ニーズをどのよう感知しているこうかと作戦を練る矢野さん。

経営が楽しくてしようがないようだ。

「人並みのことをしていても人並みにしかなれませんよね」

標高が違う畑でどのタイミングで播種をする？ 緑肥の種類は？ 堆肥と化成肥料のバランスは？

借地による連作障害の悪循環をどう打破するのか？ 自分で長い期間管理できる畑はどうしたら手にはいるのか？ 連作障害にならないような土づくりにどう取り組むのか？ 堆肥はどんなものがいいのか？ その為に必要な設備や機器は？

地元の農協の大根部会のメンバーが年々減っていくことだ。大根の様な作物は、ある程度数量がまとまらないと市場で不利になる。しかし、価格の混

迷、高齢化、連作障害との苦戦……時期の半分のメンバーにまで減っている。

と笑う。

農業経営は、一つのスタイルを完成する。

ましてや今まで継

続してきたスタイルから脱却して新天地で仕切り直しをする

ということは、かなりのエネルギーが必要とされる。

矢野さんは、それを開墾地への転身という形で行つたのだ。

手探りでの土づくり。周囲の冷たい視線。数々の障害を乗り越えてきた矢野さんの顔は、控えめながら、すがすがしさを醸し出している。

「相場が盛り返してきても、売るものがなければだめだ」と語る矢野さん。継続して、高品質の大根を生産し続ける。そのためには数え切れない判断と決断が必要であつただろう。

しかし矢野さんの顔は、それを楽しんでいるかのように見えてくる。



「堆肥の足しにはならないけど、親父の付き合いで飼っているんです」と和牛2頭

「毎日が楽しいですよ」「今度はどういう栽培してみようか？ とか、あの機械を試してみようか？ とか、楽しくてしかたないですよ」

自分の判断で、新天地で、自分の思うような土づくり、いや、経営の器づくりができたことの証しが満足げに、楽しげに語らせるのである。